

### 2-4 「とちかち創生学」を核とした活動の広がり

**Literacy**

本別町農協との共同開発「カレーでナイト」



完成記念、農協組合長と

**Student**

松月堂との共同開発「本高フィナンシェ」



「放課後SOY倶楽部」藤丸で販売(2022.11.13)

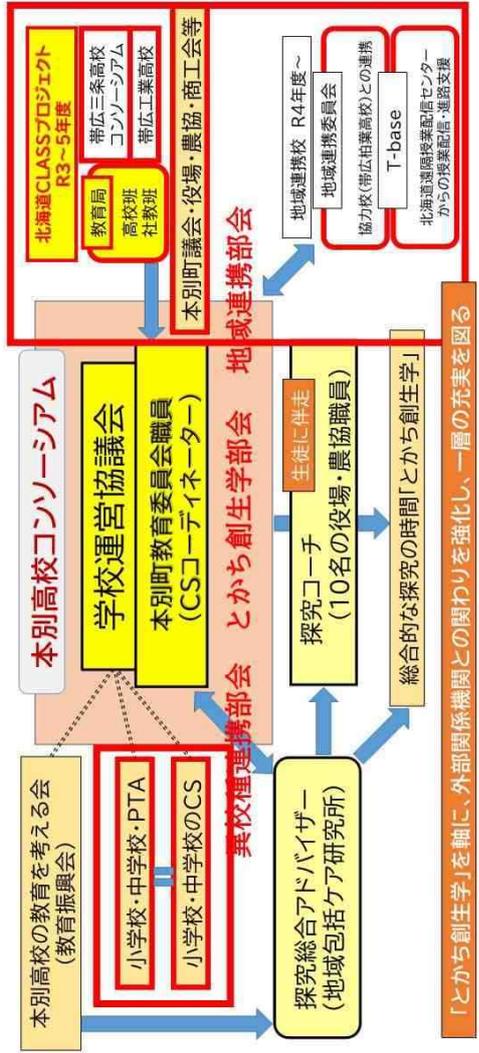
2年生までの授業内での取り組みから派生

町内事業者の「子どもたちが考えたことを実現してあげたい」という思いから実現した課外活動「放課後SOY倶楽部」。

カレー、フィナンシェともに、本別町の「ふるさと納税返礼品」となっている。

### 3 今年度の重点「つながり」の強化

## Collaboration System



### 4-1 持続可能なものとするために

**System**

キーワードは「持続可能な地学協働」

**Adult**

「だれがやってもできるように」

- マンパワーから組織的体制へ (とくに校内組織の確立)
- 専任担当者の人材確保 (CS推進員の確保)
- 計画と実施の見える化、マニュアル化 (情報共有の機会を増やす)

**Collaboration**

「とちかち創生学」を中心に据えたコンソーシアムの構築と拡大

- 積極的な情報発信により、認知度を上げる
- 発表をはじめとする生徒の活動を学校の外 (人の集まる場所) へ

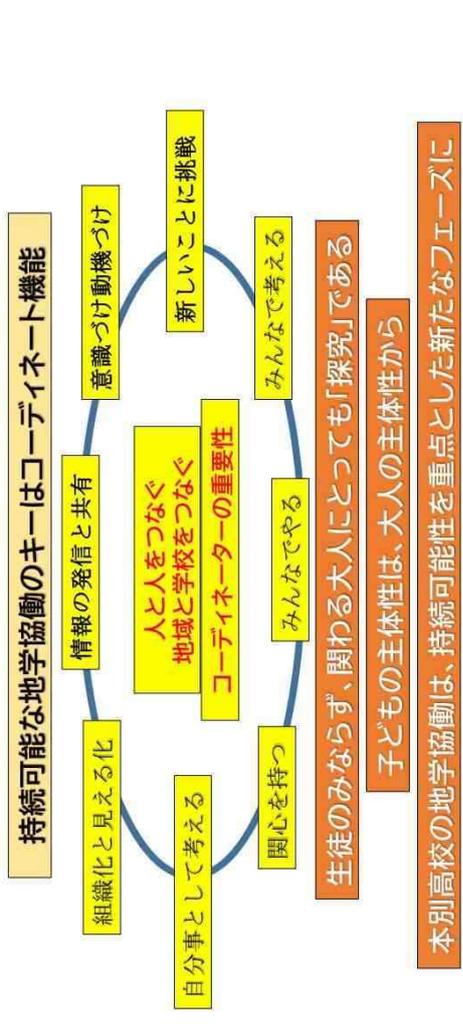
「こなす」活動とならないように

- アドバイザー、コーディネーター、コーチ等の打ち合わせを密に
- 前例踏襲を避け、新しい発想を取り入れる
- 教員への意義付け、動機付けを行う

創生学をもちかけに、地学協働の意識を高める

### 4-2 持続可能なものとするために

## CLASS



### 1-1 本別町について

**本別町の概要 (2023.3.31現在)**

- ◎人口 6,208人
- ◎世帯数 3,459世帯
- ◎基幹産業 農林業 (乳用牛 約13,000頭)
- ◎面積 約39.2 Km<sup>2</sup> (東西 31.8 km 南北 16.5 km)

20230714 生涯学習社会と学校教育

13

14

ご清聴ありがとうございますございました。

以下は、資料としてご覧ください。

20231116 地学協働研究大会

### 1-2 本別高校の概況と現状

減少する中卒者 (本別町)  
**R4 35名(現2年)** **R5 51名(現1年)** **R6 48名(現中3)** **R7 31名(現中2)**  
 背景には人口減。  
 令和4年度に普通科40名定員に。現在の出身地域別生徒数は以下のとおり。

	1年	2年	3年	計
本別町	20名	14名	25名	59名
浦幌町	9名	5名	1名	15名
その他	4名	2名	1名	7名
計	33名	21名	27名	81名

町内中学校から本校への進学率は、概ね40～50%程度で推移している。  
**浦幌町からの進学者が増加傾向。**  
 本別町からの通学・下宿等の支援によるところが大きい。

**教諭8名、養護教諭1名** **地方の小規模校のスクールメルリットを生かす**

20231116 地学協働研究大会

15

### 1-3 どんな生徒を育てるか

スクール・ミッション

- 1 地域の高校として、地域の教育資源を活用した教育活動を通じて、地域の未来を創っていく生徒の育成
- 2 社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を身に付け、持続可能な社会の実現に努める生徒の育成
- 3 グローバルな視点を持ち、社会の変化や社会課題に対応できる生徒の育成

育成を目指す資質・能力

- ① 課題解決力
- ② 創造力
- ③ 主体的行動力
- ④ 協働力
- ⑤ コミュニケーション能力
- ⑥ 遂行力

20231116 地学協働研究大会

16

## 2-1 資質・能力を実際育てるための「とちかち創生学」

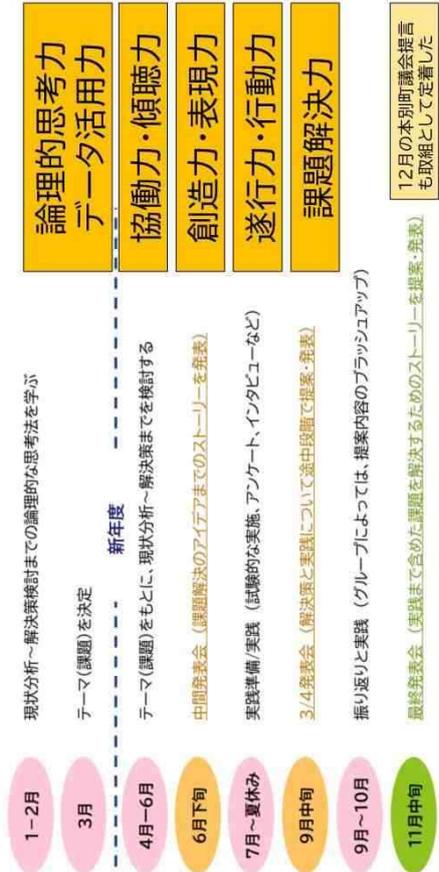
### 「第1学年・とちかち創生学」のカリキュラム



20231116 地学協働研究大会

17

## 2-3 「とちかち創生学」1年次後半～2年次のスケジュール概略

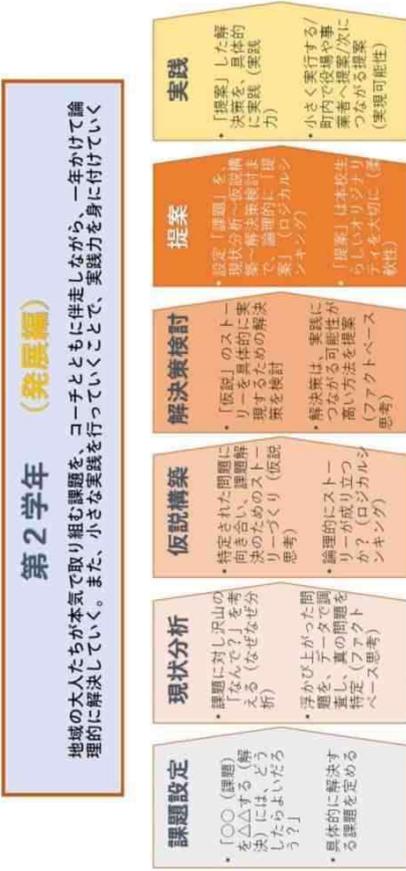


20231116 地学協働研究大会

19

## 2-2 資質・能力を実際育てるための「とちかち創生学」

### 「第2学年・とちかち創生学」のカリキュラム



20231116 地学協働研究大会

18

## 2-4 とちかち創生学」の内容

### 1学年 地域の魅力を発信する動画・ポスター製作



20231116 地学協働研究大会

20





## 5-1 成果 (生徒の変容)

### Literacy

### Student

【1年生】4段階自己評価(身についてと思う)5月→11月回答数の推移

- ・思考力(19→22)・判断力(17→22)・表現力(11→17)
- ・課題解決力(19→21)・柔軟性(20→25)・行動力(20→22)
- ・傾聴力(24→27)

【2年生】身についた力(昨年11月)

- ①人前で話すこと ②上手な人間関係の築き方 ③積極性
- ④リーダーシップ ⑤自主性 ⑥責任感 ⑦視野が広がる ⑧メンタル
- ⑨嫌なことから逃げないこと ⑩考え方が大人になった
- ⑪物事を多角的に捉える力 ⑫コミュニケーション力 ⑬人への優しさ
- ⑭相手の意見を尊重する力

### 【卒業生】

- ・本別町役場採用者…探究コーナーの後ろ姿を見て、町への愛着が醸成された
- ・室蘭工業大学進学者…探究活動の内容をアピール
- ・大学進学者…多面的に物事を捉えたり、ゼミ形式のグループワークで活きている



1年生 議会傍聴の様子



2年生 フィールドワークの様子

## 5-2 成果 (生徒の変容)

### Literacy

### Student

「本校が育成を目指す6つの資質・能力」

- ① 課題解決力 ② 創造力 ③ 主体的行動力 ④ 協働力 ⑤ コミュニケーション能力 ⑥ 遂行力

生徒事後アンケートから

- ・本別町についての課題を設定し、自ら解決に向けて活動していくことが難しかったですが、仲間と協力し合い解決策などを考えていくことにとてもやりがいを感じました。1年を通して論理的に考える力が身についたと思います。
- ・人に対して何かをプレゼンしたり話して説得したりするときにどうしたら自分にとって良いように話を持っていけるのかを学びました。改善点はやるのが最後のほうに大量に残ってしまっただけで、計画性のなさです。
- ・今回の創生学で私は計画を立てて行動しアンケートを実施するのにもいつまでも何をを行うのかなど、予定をしっかり決めておくことが大切だと思いました。また、現状分析をするときにしっかりと筋が通る裏付けを考えることが難しかったです。

## 5-3 成果として見えてきたこと

### Literacy

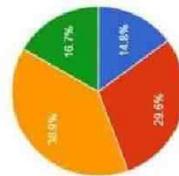
### Student

25 あなたは町長、地元(本別町または出身市町村)に戻って仕事をすると、地域に貢献したいと思っていますか？

54名の回答

昨年度の事後アンケートから

- 4 とても思う
- 3 思う
- 2 あまり思わない
- 1 まったく思わない



およそ45%の生徒が、将来地元に戻って仕事をすると、地域に貢献したいと思うようになっている。

この項目は、1つの指標になると考えています。目にも見える成果は、まだ少しだけです。本当の意味で成果が出るのは、数年後、あるいは10年後、20年後かもしれません。卒業後も継続的な働きかけをしなければ、地元へ帰るように戻ってきて活躍するなどというのではないのかもしれない。しばらくは継続して、地域の協力を得られるような活動を真摯に積み重ねていくことが必要です。

## 5-4 成果 (教師の変容)

### Literacy

学校評価より

4…十分達成できている 3…達成できている 2…やや不十分である 1…不十分である

Q 総合的な探究の時間の時間は、目的を踏まえた内容で指導計画に基づき、教科横断的、組織的及び計画的に実施されているか

R3 前期3.3→後期3.3 R4 前期3.5 R5 前期3.9 R3 前期3.3→後期3.3 R4 前期3.5 R5 前期3.9

OR3は、担当者以外、当事者意識が希薄で活動の内容が見えていない状態だった。OR4になって、活動に関わる教職員が増え前期の評価が上がったが、1年間の活動を通じて当事者意識が高まり課題が見えてきたため、後期の評価が下がった。

OR5は、探究活動に全員が主体的に関わるようになり、当事者意識の高まりとともに評価が上がった。

数値としての評価が一時的に下がることも、マイナスばかりではない

## Literacy

## 5-5 成果（地域の評価）CS委員・町議会・教育委員会・役員職員等

R4学校評価より

4…十分達成できている 3…達成できている 2…やや不十分である 1…不十分である

Q 本別高校は、地域との連携を図り教育活動を行っていると思えますか？ 3.7

Q 本別高校は、地域の大人たちと協力した学習活動をしていると思えますか？ 3.7

○本校の教育活動に関わりがあり、比較的関心の高い方々からの回答ではあるが、地域の評価は概ね好意的である。

○同設問で、保護者が両項目とも3.1と低いことから、保護者の関心を高める情報発信等の工夫が必要である。また、より多くの地域住民に本校の活動を知ってもらうための方策(町広報誌やSNSの活用)をとり、探究学習をはじめとする教育活動の認知度を上げることが今後の課題といえる。

知ってもらうこと → 応援・協力してくれる人を増やす

資料 本 8

令和 5 年度 北海道CLASSプロジェクト実施成果報告書（3 年次）

学校名	北海道本別高等学校
作成日	令和 5 年 1 2 月 2 6 日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	Collaboration
	検証の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事前・事後アンケート及び学校評価アンケートの「地域の大人たちと協力した教育活動」の項目の比較と考察</li> <li>・ 学校評価における委員及び関係者からの意見聴取</li> </ul>
	検証結果	<p>・ 【地域の大人たちと協力した教育活動】の項目で「十分達成できている」「概ね達成できている」を合わせた数値の経年比較及び分析</p> <p>現 2 年生の経年比較 R4 : 86.7% → R5 : 90.5% (3.8 ㊦ イント上昇)</p> <p>保護者の経年比較 R4 : 84.4% → R5 : 87.9% (3.5 ㊦ イント上昇)</p> <p>・ 【地域の小中学生との交流】の項目で「十分達成できている」「概ね達成できている」を合わせた数値の経年比較及び分析</p> <p>生徒 R4 : 77.8% → R5 : 70.8% (7.0 ㊦ イント下降)</p> <p>保護者 R4 : 65.7% → R5 : 75.7% (10.0 ㊦ イント上昇)</p> <p>関係者 R4 : 78.2% → R5 : 70.0% (8.2 ㊦ イント下降)</p> <p>生徒は、1～2 年次の継続的な活動を通じて、地域の大人と協力した教育活動が行われ、地域から自身の成長を支援してもらっていると感じる割合が高くなっている。地域との協働による探究活動が保護者にも浸透し、理解が得られている。</p> <p>生徒及び地域関係者の【小中学生との交流】の項目で関係者評価が下がっているが、生徒においては、コロナ禍の影響で 1・2 年時に交流が叶わなかった 3 年生が小中学生との交流について不十分と感じている。</p> <p>地域関係者からは、数年で得られた地学協働への理解の深まりとともに、教科横断的な学びや教育課程、生徒指導等における小中高の連携への期待が高まっている結果と捉えることができる。</p>

②	検証の項目	Literacy
	検証の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事前・事後アンケートの「思考力」「判断力」「課題発見力」「発想力・課題解決力」の項目の前後比較</li> <li>・ 生徒の探究活動、各教科・科目の「振り返りシート」及び保護者アンケートによる評価</li> </ul>
	検証結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒の【身に付いている力】の 4 月と 12 月の比較</li> <li>「思考力」4 月 : 60.4% → 12 月 : 72.6% (12.2 ㊦ イント上昇)</li> <li>「判断力」4 月 : 60.5% → 12 月 : 76.5% (16.0 ㊦ イント上昇)</li> <li>「課題発見力」4 月 : 54.2% → 12 月 : 64.7% (10.5 ㊦ イント上昇)</li> <li>「発想力・課題解決力」4 月 : 68.8% → 12 月 : 76.5% (7.7 ㊦ イント上昇)</li> </ul>

資料 本 8

		<p>・【「とちかち創生学」は、社会人基礎力の育成や生徒の地域理解、地域への愛着などを育む教育として活かされている】の項目で「十分達成できている」「概ね達成できている」を合わせた数値の経年比較</p> <p>保護者 R4：75.1%→R5：92.6% (17.5ポイント上昇)</p> <p>の結果から、1年次からの継続した活動が、本校が目指す資質・能力の育成につながっており、保護者の理解が得られている。</p>
--	--	---

③	検証の項目	Adult
	検証の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒アンケートの「地域の大人たちに支えられている」「将来、地域に貢献したい」の項目の経年比較</li> <li>・探究コーチや関係者アンケートの「地域の大人たちと協力した学習活動」の項目の経年比較及び傾向分析</li> <li>・地域人材と協働して課外活動を行った生徒への聞き取り及び教員アンケートによる自己評価</li> </ul>
	検証結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・【地域の大人たちに支えられている】の項目で「強く思う」「思う」を合わせた数値の経年比較及び分析</li> <li>現2年生の経年比較 R4：86.6%～R5：85.7% (1.1ポイント下降)</li> <li>現3年生の経年比較 R4：88.0%～R5：96.2% (8.2ポイント上昇)</li> <li>・【将来、地域に貢献したい】の項目で「強く思う」「思う」を合わせた数値の経年比較及び分析</li> <li>生徒(全学年共通) R4：44.4%→52.4% (8.0ポイント上昇)</li> <li>・【地域の大人たちと協力した教育活動】の項目で「十分達成できている」「概ね達成できている」を合わせた数値の経年比較及び分析</li> <li>関係者 R4：100%→R5：95.0% (5.0ポイント下降)</li> <li>・【保護者や地域との連携・期待に応える教育活動】の項目で「十分達成できている」「概ね達成できている」を合わせた数値の経年比較及び分析</li> <li>保護者 R4：84.4%→R5：87.9% (3.5ポイント上昇)</li> <li>関係者 R4：95.6%→R5：85.0% (10.6ポイント下降)</li> </ul> <p>総合的な探究の時間の活動で大人と関わり、共に課題解決を図ることによって、生徒の地域への愛着が醸成されている。経年比較からは、3年生になってから、地域とのつながりを強く感じる傾向が見られる。</p> <p>地域の関係者は【本別高校は、地域との連携を図り、教育活動を行っていると思うか】の項目について、95%が好評価し、【本別高校は、保護者や地域との連携・期待に応える教育活動を行っていると思うか】の項目についても、保護者、地域関係者の双方から好評価を得られている。</p>

資料 本 8

④	検証の項目	Student
	検証の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事前・事後アンケートの「チャレンジ精神」「協働力」「リーダーシップ」「人間関係形成力」「協調性」「自己効力感」の項目の前後比較</li> <li>・ 事後アンケートの自由記述欄への記載事項の分析</li> </ul>
	検証結果	<p>・ 生徒の【身に付いている力】の4月と12月の比較</p> <p>「チャレンジ精神」4月：64.6%→12月：76.5%（11.9ポイント上昇）</p> <p>「協働力」4月：87.5%→12月：86.3%（1.2ポイント下降）</p> <p>「リーダーシップ」4月：54.2%→12月：47.1%（7.1ポイント下降）</p> <p>「人間関係形成力」4月：77.1%→12月：82.6%（5.5ポイント上昇）</p> <p>「協調性」4月：75.1%→12月：76.5%（1.4ポイント上昇）</p> <p>「自己効力感」4月：52.1%→12月：56.9%（4.8ポイント上昇）</p> <p>1年次からの継続した活動が、本校が目指す資質・能力の育成につながっている。今年度は実践に重点を置いたことが、チャレンジ精神や自己効力感の醸成に効果的であった。事後アンケートの自由記述欄には、大人との視点の違いへの気づきや思考の進め方などについて、さまざまな角度からの感想が見られたことから、探究によって学びが深まった様子や実践を伴う協働の活動が将来へのモチベーションとなっている。</p> <p>協働力とリーダーシップの項目でポイントが下降しているが、これも他者との協働の中で、自己を客観的に見つめることができるようになった人間的成長と捉えることができる。</p>

⑤	検証の項目	System
	検証の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教職員による総合的な探究の時間の実施状況の評価</li> <li>・ 学校運営協議会委員及び関係者からの意見聴取</li> <li>・ 校内研修会・職員会議等における校内体制に係る意見交換と年次計画、役割分担等の改善状況</li> </ul>
	検証結果	<p>・ 教職員アンケート【総合的な探究の時間は目的を踏まえた内容で指導計画に基づき、教科横断的、組織的及び計画的に実施されているか】の項目で「十分達成できている」「概ね達成できている」を合わせた数値の経年比較及び分析</p> <p>R3：前期 3.3→後期 3.3、R4：前期 3.5→後期 3.1、R5：前期 3.9→後期 3.5</p> <p>R4～R5は、前期評価が高く、後期評価が低くなっている。R3が横ばいであることと比較すると、全教職員の当事者意識が高まったことにより、現状に課題を持ち改善に向けて自己評価している結果と捉えられる。</p> <p>地域関係者からは、探究コーチによる伴走体制、地域の教育資源を活用した教育活動について好意的な意見が多数寄せられているが、CS機能を活用した小中学校との連携や生徒間交流については、不十分であるという意見が多い。</p>

資料 本 8

2 当事者の声について

生徒	
教諭	<p>【教員アンケートより】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 昨年よりも一段階、生徒の取組の質が上がった。それは、実践を重視してインプットを1年生の後半から始めたことが大きい。</li> <li>・ マンネリにならずに、常に新しいことを取り入れていかないと、数年で取組が衰退してしまう。</li> <li>・ 教員が、総合的な探究の時間の内容を理解していないと、生徒の探究学習に対するモチベーションは上がらない。</li> <li>・ 計画と実施の段階からアドバイザーが、日常の授業にコーチが関わってくれている現状は本当にありがたい。</li> <li>・ この取組は、間違いなく生徒にはプラスになっている。総合型選抜や推薦入試、公務員受験などの際、面談における対話の材料になるし、話す力と聴く力は確実に上がっているため、進路にも生きる。</li> </ul>
地域の方	

3 今年度（令和5年度）の取組について

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	総合探究打合せ	・ 課題解決グループ討議[2年:4~6月]
5	総合探究打合せ	・ トークフォークダンス①[1年:5月]
6	第1回学校運営協議会会議 本校ガイダンス打合せ	・ 探究フィールドワーク①[1年:5月] ・ 地域人材インタビュー[1年:6月]
7	総合探究打合せ	・ 地域PR動画作成講義[1年:6月]
8	総合探究関係者打合せ 学校説明会関係者打合せ	・ 中間発表[2年:6月] ・ 動画制作フィールドワーク[1年:7~9月]
9	総合探究関係者打合せ	・ 探究フィールドワーク[2年7~9月]
10	総合探究関係者打合せ CS理科授業関係者打合せ	・ 総合探究中間発表[1年:9月] ・ 総合探究中間発表[1年:9月]
11	総合探究関係者打合せ 第2回学校運営協議会会議 地学協働研究大会 模擬議会提案関係者打合せ 地学協働高校生チャレンジ打合せ	・ 総合探究成果報告[1年:10月] ・ インターンシップ・報告会[1年:10月] ・ 地域おこし協力隊との授業[2年:10月] ・ JICA・地域おこし協力隊との授業[3年:11月] ・ 総合探究成果発表[2年:11月]
12	総合探究関係者打合せ 総合探究コーチ振り返りミーティング	・ 動画・ポスター英語発表[1年:12月] ・ 探究成果の町議会提案[2年:12月]
1	総合探究校内研修会	・ 他校交流[1・2年:12~2月]
2	総合探究関係者総括会議 CS事業次年度計画会議	・ 2年総合探究論文作成[12月] ・ 2年海外研修で英語発表[1月]

**資料 本 8**

3	総合探究関係者打合せ 探究イベント「とかち創生学の日」	・ 2 年海外研修報告会 [ 2 月 ] ・ トークフォークダンス② [ 1 年 : 3 月 ]
---	--------------------------------	---

**4 自走可能な体制整備に向けた方策について**

- ・ 校内委員会の組織を見直し、各学年の校内担当者とその役割を明確化した。
- ・ 総合アドバイザー、教頭、CSコーディネーター、校内担当者の打合せを定例化し、現状と課題を共有化できる体制を整えた。
- ・ 取組の内容などの引継ぎができるよう、探究コーチを 1 班 2 名体制、経験者と未経験者をセットにした。
- ・ 次年度、探究コーチ経験者をコーディネーターとして採用できるよう、町役場担当課と協議を重ねている。

**5 圏域の研究指定校等、他校との連携・交流について**

- ・ 12 月 20 日現在、圏域の CLASS 生徒間の交流は行っていない。
- ・ 11 月の本校 2 学年成果発表会に、推進校の帯広三条高等学校探究担当教諭が来校し参観した。
- ・ 指定校以外の高校が、本校の探究成果発表会をオンライン参観した。
- ・ 12 月の推進校帯広三条高等学校 2 学年成果発表会に、本校教諭が参加した。
- ・ 12 月の「地学協働高校生チャレンジ in どさんこプラザ」に生徒 2 名が参加し、千歳高校、更別農業高校の生徒と協働して販売会に携わった。また、事前・事後の意見交流会において司会を務めるなど、本校生徒が中心的役割を担った。

**6 学校独自の取組・工夫**

- ・ 本校理科教員と地域おこし協力隊員が協働して、生物基礎のフィールドワーク授業を行った。
- ・ 本別町立勇足中学校の探究活動発表会に、高校生を派遣した。
- ・ 本校 CS 事務局が町内小中学校の CS 会議に出席し、本校 CS の取組について説明し、連携と協力を依頼し、コンソーシアムを拡大した。
- ・ 保護者向け学校説明会及び中学生向け学校説明会に、探究活動関係者（総合アドバイザーや探究コーチ）を招き、生徒を交えてトークセッションを行った。

**7 その他特記すべき事項**

- ・ 2 年生の探究グループが、本別町農協と帯広商工会議所の協力を得て、大豆ミートを使用したレシピ開発を行い、マレーシアで行われたハラルの国際見本市「MIHAS」に試食品を出品した。その際、生徒が英語でアンケートを作成し、Google Forms を活用して現地からリアルタイムでレビューを集めた。また、1 月には、帯広商工会議所主催のムスリムフレンドリーセミナー & ビジネスマッチングで、研究成果のプレゼンテーションを行う予定である。

資料 本 8

< 3 年間のまとめとして >

8 3 年間の成果

- R3：CS 機能の活用と充実を図り、探究活動を軸に地域の教育資源を活用し、コンソーシアムを設置した。総合的な探究の時間「とかち創生学」においては、育成を目指す資質・能力を具現化するための各学年のプログラムを確立した。JA 本別との協働で「カレーでナイト」が商品化された。
- R4：研修機能を持たせた CS 会議の活動をコンソーシアムに拡大しながら展開し、探究活動を含む教育活動の地域への浸透を促進した。本校生徒の有志 4 名と地元菓子店、地域おこし協力隊の協働による放課後 SOY 倶楽部が「本高フィナンシェ」を商品化し販売会を行った。また、町広報誌や各種媒体による情報発信に注力し、地域の関心を高めることができた。
- R5：活動を持続可能なものとするため、地域の関係する個人・団体等との連携を強化することができた。探究活動発表会の参観案内範囲を広げることで、地域から幅広く意見聴取をすることができた。校内担当者、総合アドバイザー、コーディネーターによる打合せを定期開催し、役割を明確化することができた。

9 3 年間の課題

- 年次ごとに課題を設定し、段階的に改善を進めてきた。
- R3：探究活動を軌道に乗せること、アドバイザーやコーディネーターとの連携、探究コーチの機能など、活動内容に係る改善が主な課題となっていた。また、教職員の当事者意識を高めること、活動に関わることも課題であった。
- R4：校内体制を整備し学校全体の取組とすること、外部との役割分担を明確化すること、コンソーシアムを拡大し教育活動に関わる地域住民を増やすことなど、探究活動の内容から体制構築と持続可能化へ課題が変化した。
- R5：探究活動は内容が充実し、生徒の学びの質は向上しているため、持続可能な活動及び体制構築に向け専任コーディネーターの採用など具体的な方策を講じること、総合的な探究の時間と各教科・科目の横断、地域の小中学校との教育課程の連動、生徒の活動を地域の魅力化に繋げる取組とすることなど、新たな課題が見出されている。また、今年度は 1 月に初のオーストラリア海外研修が 2 年生の希望者全員を対象に実施されるため、グローバル人材の育成も課題となる。